

第6回日本白斑学会学術大会・ 第4回東アジア白斑学会会議を終えて

(2024年9月21～23日)

※山形テルサとWeb配信のハイブリッド開催

鈴木 民夫

山形大学医学部皮膚科学講座教授

はじめに

山形テルサ(山形市)にて、第6回日本白斑学会学術大会(JSV2024)とThe 4th Meeting of East Asia Vitiligo Association(4th EAVA ; 第4回東アジア白斑学会会議)を合同で開催しました。日本白斑学会(JSV)はまだまだ新しい学会です。2018年に開催された第1回の学術大会は参加者が20人足らずでしたが、その後、会長の片山一朗先生(現・大阪大学

名誉教授)のリーダーシップと溢れ出るアイデアにより、学術大会を重ねるごとに参加者が増え、大学研究者のみならず、企業研究者、開業医等が次々に参加してくれるようになり、発表内容のレベルも上がってきている“伸び盛り”の学会です。一方、東アジア白斑学会(EAVA)は韓国、台湾、上海、そしてわが国の4つの白斑研究組織によって構成され、2016年にソウルで第1回の学術大会が行われて以来、開催国は持ち回りで原則隔年で学術大会が開



図1 主だった大会参加者の集合写真

およそ半数の参加者はオリジナルTシャツを着用していました。

催されています。参加者のそれぞれが旧知の仲であり和気あいあいとした中にも、学問的には切磋琢磨してきた仲間が集う学会です。今回、われわれ教室員一同で、各地から参集する白斑研究者に学会とともにYAMAGATAを楽しんでもらえるように精一杯の準備をしました。参加者は総計174人(海外21名)でした(図1)。

プログラム

前半は英語セッションとし、EAVAメンバーの研究者に講演をしてもらいました。その後に一般演題の発表もあり、どの演題も熱のこもったものでした。特別ゲストとして、vitiligo関連遺伝子研究領域で世界を牽引してきたR.A. Spritz博士(米国コロラド大学)と、国際色素細胞学会会長でありalbinism研究領域の国際的リーダーであるLluís Montoliu博士(スペイン国立理化学研究所)をお招きし、それぞれ1時間の講演をしていただきました。あっという間に1日半の英語セッションが終わりました。

後半は日本語セッションです。国内の所属分野が異なる研究者が生き生きと、そして楽しそうに発表と討論をしている姿が印象的でした。本学会恒例の文献紹介コーナーも好評でした。過去1年間に発表された白斑関連の論文を基礎編と臨床編に分けて担当理事の先生方に解説してもらうものです。ここさえ聴いていれば1年分の勉強ができる、極めて“コスパのよい”セッションです。こうして日本語セッションも好評のうちに終了し、来年の再会を約束してプログラムは終了しました。

おわりに

今回の学会で、主催者としてプログラム内容にもっとも心を砕いたのはもちろんですが、それ以外の点で大事にしたことは、参加者に「参加して楽しい学会」と感じてもらうことでした。そのため、堅苦しいスーツ、ネクタイは原則禁止、ドレスコードはカジュアルにして、心も身もフランクな状態で参加してもらうようにしました。その呼び水にな



図2 今回作成した2種類のオリジナルTシャツ

「白斑」をモチーフにした白と黒のデザインとしました。かなり余分につくりましたが、好評のため学会終了時にはなくなってしまいました。

るように、学会オリジナルTシャツ(図2)もつくって参加者に配布し、懇親会ではYAMAGATAの誇る食材(米沢牛、十四代などの銘酒、冷やし担々ラーメン、納豆汁など)を惜しみなく提供し、存分に味わってもらいました。お土産には学会オリジナルボトルの山形地酒を用意しました。その結果、海外からの参加者も含め、多くの皆さんに、「楽しく、美味しい(?)学会だった!!」といってもらえることができ、主催者としてはたいへん嬉しい思いをしました。